

20240428 「人にはできないが、神にはできる」
 マタイ 19：16～30 牧師 中谷美津雄

<導入>

昨日は、心配していた雨も上がって、春の子ども会スペシャルが開かれました。玖珂のお友だちと、高森の子たちも加わって、初めて来た子どもが3、4人いたでしょうか。全部で16人の子どもたちと、6人の保護者の人たち、6人のスタッフで楽しい良い時を過ごすことができました。お祈り感謝します。

イエス様のところには色んな人が色んな目的を持ってやってきました。19章にはまず、パリサイ人たちが出てきます。彼らはイエス様を試みる高慢な思いを持って来ましたが、イエス様の見事な回答を聞いて手も足も出ませんでした。次は子どものために祈ってもらおうとしてやって来た人たちです。弟子たちは彼らを叱りましたが、イエス様は、「天の御国はこのような者たちのものなのです」と言って、子どもたちを祝福されました。自分の力を誇らない謙虚な子どものような心を弟子たちに模範として示し、祝されたのでした。三番目が今日の箇所に出てくる一人の人です。この人はどんな人で、どんな思いを持ってきたのでしょうか。

<転移>

今日はこの人とイエス様との会話、その後続く弟子たちへの教えに学び礼拝を捧げましょう。

<本論>

I. イエスのもとに来た一人の人 (16)

どんな人だったのでしょうか。

1. 青年(20、22)でした。
2. 金持ち(22、23)でした。
3. 指導者(ルカ 18：18)、(役人：第3版)でした。

指導者と訳されたこのことばは他の箇所では「会堂司(マタイ 9：18)、「この世を支配する者」の「支配する者(ヨハネ 12：31)」、

「支配者(黙 1：5)」、「ユダヤ人の議員(ヨハネ 3：1)」の「議員」など、多様に訳されています。

ですからこの青年は、指導者、支配する者、支配者、議員などと呼ばれる立場にいた人でした。その意味では、直前でイエス様から祝福に預かった子どもたちとは霊的に対照的な人でした。

子どもたちはイエス様のところに連れて来られて、弟子たちから邪魔物扱いされるほど、人間的には無力で無価値な者たちでした。しかし、イエス様には「天の御国はこのような者たちのものなのです」と言われるほど、御国に入る人の霊性の模範とされました。

これに対して、この青年の霊性はどうかだったのでしょうか。この人は自分から求めてイエス様の所に来て、イエス様からも「わたしについて来なさい」と招かれたにもかかわらず、悲しみながら去って行きました。見えるところが対照的ですが、それは、見えないところ、子どもたちの霊性と、この人の霊性が対照的であることの現れだと言って良いでしょう。

II. 求めていたもの (16～)

16節に「一人の人がイエスに近づいて来て」とあるところを、マルコ 10：17には、「ひとりの人が駆け寄り、御前にひざまずいて尋ねた」と記されています。マタイはあっさり書いていますが、マルコの書き方からはこの人の熱意が現われています。この人は真剣に求めていたに違いありません。彼が真剣に求めていたのは「永遠のいのちを得る」ことでした。

この人は、若くして、指導者としての社会的な立場に立ち、金持ちでもありました。人間的には良いものを皆持っているながら、なお心に満足が得られなかったのです。

しかし、人が他の動物と違って、尊い存在であるのは、正にそこにあると言ってよいでしょう。肉体的、精神的な欲望を満たす

全てが揃っていても、それでも十分とはいえない。人の魂の満足、霊的な平安や喜び、満足感はそのものだけでは得られないのです。この人は自分にはまだ何か欠けているものがあると思い、「永遠のいのち」を求めて、イエス様のもとに来ました。彼が求めていた「永遠のいのち」とはどんなものなのでしょう。

1. 「永遠のいのち(16)」

終わることなくいつまでも続くいのちです。しかし、この世界でいつまでも行き続けるとしたら、これはどうでしょうか。

厚生労働省が5年前に発表した数字で見ると、

男性の平均寿命は 81.41 歳、女性が 87.45 歳だそうです。しかし、健康寿命で見ると、男性は 72.68 歳、女性が 75.38 歳です。

歳をとるにつれて、身体だけでなく、知力も弱まります。家族の名前も分からなくなり、自分の名前も思い出せなくなってしまう。

昨年私は手術のために初めて入院しました。面倒で嫌になるほど面倒だったことがあります。何をすることも、名前と生年月日を言わされることです。本人確認のためですが、認知が入っていないかを一日に何度も確認されるみたいで、他人に名前を聞く前に、まず自分の名前を言ってくれと言いたくなるというのは、冗談ですが、面倒でしたね。

長く生きていけば、肉体的にも精神的にも、知的にも衰えて来ます。

周りの環境もどんどん悪化してきています。ですから、色々な意味でこの世界に永遠に生きることは辛く苦しいことでしょう。

では、永遠のいのちを言い換えるとどうでしょうか。

2. 「天の御国に入る(23)」と言い換えられています。天の御国には罪や悪はありません。この世界とは別の世界です。聖書の最後の書物、黙示録は今の世界が過ぎ去って、新しい天と新しい

地が来ることを預言しています。そこは罪赦された人々が行くことのできる世界です。

イエス・キリストを信じると、その人は永遠のいのちを受けるのですが、この地上にある限りは天の御国の祝福を百パーセント味わうことはできません。真の神様を知り、永遠のいのちを受けた人は、霊的な平安や喜び、充足感を受け味わうことができますが、それは天の御国に入って味わういのちの喜びの前味だと言って良いでしょう。

3. 「救われること(25)」と言われています。

「天の御国に入る」のは死んでから先のことではありません。今、地上で、イエス・キリストを信じて、罪を赦していただくことができます。その時、その人の魂は神様のご支配のもとに移され、天の御国に入り、御国の平安と喜びの前味を味わいますが、身体はまだ今の世にありますから、救われた平安と喜びを持つことで、確信を持って新しい天と地、御国のなることを待ち望むことができるのです。

この青年は人としてはよいものをたくさん持っていましたが、それだけでは天の御国に入れないと気付いていました。ですから、何か足りない、何が足りないのだろうと思い、イエス様のものに来たのです。

Ⅲ. 救いを得るための彼の方法、手段 (16～)

この人は「どんな良いことをすればよいのでしょうか。」とイエス様に尋ねました。永遠のいのちを得る方法、或いは手段を尋ねたのです。イエス様は最初、「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方はおひとりです」と言われます。何だか上げ足を取るような感じがしないでもありませんが、イエス様は永遠のいのちを得るために自分の力で善い行いを積もうとしている、彼の発想、考え方そのものに潜む間違いに気づかせようと

されたのでしょう。人は自分の力で神様の御前で善人や義人になることはできない。「良い方はおひとりです」ただ神お一人だけが義であり善であられて、そのお方の前で、人は皆罪ある者、罪人でしかない。そのことに気付かせるために、イエス様は「いのちに入りたいと思うなら戒めを守りなさい」と答えられます。すると彼は「どの戒めですか。」と聞きます。そこで、イエス様はモーセの十戒の後半部分を語り、それを要約した戒めと言われるレビ記 19：18 を示されました。

すると彼は答えます。「私はそれらすべてを守って来ました。何がまだ欠けているのでしょうか。」

この会話から、永遠のいのちを得るためにこの青年が取ろうとしている方法、又は手段に誤りのあることが分かります。

1. 自分の力で良い行いをすることで得ることができると考えている(16)。

これはユダヤ教的、パリサイ的な考えであり、また、ごく一般的な考え方でもあります。しかし、これは非常に傲慢なおごり高ぶった考え方です。新約聖書を読んで分かるのは、人は良いお方の前では皆罪人であり、良い行いによっては救われません。

しかし、この時イエス様は、彼の考えを頭から否定はせずに、むしろ、彼の考え方に添って進むべき道を示して行かれます。そして、彼の考えを発展させていけばどうなるかを気付かせようとされました。「戒めを守りなさい。」と言われたのはそのためです。

2. 戒めを表面的に理解して、心の深みにある罪に気付いていなかった。 イエス様が 21 節のように、一見非常に厳しいと思われる言葉で彼を突き放したのは、永遠のいのちを求めながらそれを得ることができないでいるのは、富にとらわれ執着しているからであることに気付かせてくださいました。

IV. イエスの答 (21～)

1. 財産を売り払い、貧しい人に与えて、イエスを信じつい

て行く。彼が自分は守って来たこと、気付かないままに自分の努力を誇っていることについて、イエス様は、そのようなおごり高ぶりを捨てて、イエス様を信じて従うようにと言われたのです。

イエス様は、「あなたは生ける神の子キリストです(マタイ 16：16)」と、イエス様への信仰を告白した直後の弟子たちにご自分の苦難の死と復活のメッセージを語り始められました。それが分からず信じられずに、イエス様をいさめるペテロに「下がれ、サタン。…あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」とたしなめてから、マタイ 16：24～26 のように言われました。

24・・・「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。

25 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者はそれを見出すのです。

26 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の益があるのでしょうか。そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せばよいのでしょうか。

自分を捨てることなしにはイエス様について行くことはできない、イエス様について行こうと思うなら、自分を捨てなさいと言われたのです。しかし、自分を捨てること、これはなかなかできないことですね。永遠のいのちを得て、天の御国に入るためにどんな努力も惜しまないと言った、真面目で真剣な考えを持っている好青年ではありましたが、そのような考え方そのものが永遠のいのちを得るためには邪魔をしているのだとイエス様は言っておられるのです。自分で、自分の頑張りで、自分の真面目さ、熱心さで永遠のいのちを得たい、まだ何か欠けているのなら、それを教えて欲しい、何としても頑張るから。そんな思い、考え方そのものに潜んでいる間違いに、気付きなさいとイエス様は言って彼を導き、「わたしに従って来なさい」と招かれた、召されたのです。

しかし、彼は悲しみながら立ち去りました。「多くの財産を持っていたからである(22)」と書かれています。金に対する執着心、物欲を捨てることができなかつた。物欲に縛られている自分自身を捨てることができなかつたのです。

イエス様は持っているお金も財産も何もかも捨てなければ御国に入ることはできないと言われたのではありません。金銭に縛られ、富や財産の力に頼りながら、自分の力で善行を積んで永遠のいのちを勝ち取ろうとする考え方の間違いに気づかせ、そんな考え方をしている自分自身を捨ててイエス様に従いなさいと言われたのです。永遠のいのちは自分の力で勝ち取るものではなく、遜ってイエス様を信じて従う者に神様が与えてくださる恵みなのです。ですから、「救われること」、神様に救って頂くことなのです。

2. 金持ちが救われるのは非常に難しい(23~24)

イエス様は立ち去る青年の後ろ姿を見ながら弟子たちに言われました。

23…金持ちが天の御国に入るのは難しいことです。

24…金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方が易しいのです。」

「針の穴」とは、裁縫道具の細い針の先の小さな穴ではなく、大きな門の脇にある小さなくぐり戸の事だそうです。らくだに乗ったり、荷物を担がせたらくだを連れて、大きな門の前に来ることは良く見かけることだったのでしょう。町の中に入るには、門を開けてもらわなければ入ることはできない。人は門の横の小さなくぐり戸から出入りできても、。そんなよく見かける光景を思い浮かべながら、イエス様は、天の御国に入ることの難しさの譬えとされたのです。

弟子たちはたいへん驚いて言いました。

25 それでは、だれが救われることができるでしょう。

3. 人にはできないが神にはできる(25、26)

イエス様の答えは、26節です。

26…「それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます。」

自分の力で善行を積んで救いを勝ち取ろうという、高慢な思いを捨てて、自分の力では良いお方である神様の御心にかなう善人や義人になることはできない罪人であることを素直に認め、自分を捨てて招いてくださるイエス様を信じて従う者を、良いお方神様は必ず救ってくださいます。

その証拠がイエス様の十字架と復活に他なりません。私の罪はイエス様が十字架にいのちを捨てて赦し清めてくださいました。そして三日目には復活されて、永遠のいのちがあることを示してくださいました。イエス様を信じることで私たちは心に平安と喜びを天国の前味として受けることができます。幼子のようなへりくだった素直な心で信じましょう。

<祈りましょう>